

都道府県・ 指定都市番号	36	都道府県・ 指定都市名	徳島県	研究課題番号・校種名	2 小学校
				教科名	社会
研究課題	学習指導要領の趣旨を実現するための学習・指導方法及び評価方法の工夫改善に関する実践研究 (7) 第 3 学年, 第 4 学年の内容 (地域の歴史, 地域の災害) に関わって, 教材開発, 資料作成, 学習展開等を含めた小単元計画を研究する。 (4) 第 5 学年の内容 (情報を生かして発展する産業) に関わって, 教材開発, 資料作成, 学習展開等を含めた小単元計画を研究する。				
ふりがな 学校名 (児童数)	なるときとういくだいがくふぞくしょうがっこう (590 名)				
所在地 (電話番号)	徳島県徳島市南前川町 1 丁目 1 番地 (088-623-0205)				
研究内容等掲載ウェブサイト URL	http://www.elesch.naruto-u.ac.jp/				
研究のキーワード	○認識 ○判断 ○市の様子の移り変わり ○県の自然災害 ○情報を生かして発展する産業				
研究結果のポイント	○ 「市の様子の移り変わり」「自然災害から人々を守る活動」「情報を生かして発展する産業」の教材研究の進め方を明らかにするとともに, 単元展開で活用できる教材を資料化し, 実践として具現化できた。 ○ 判断する場面を取り入れ, 社会に対する認識と判断が相互に作用する学習展開や手立てを事例的に明らかにできた。				

1 研究主題等

(1) 研究主題

現代社会の諸課題に対応した小学校社会科の教材・実践開発
 — 社会に対する認識を深め, 選択・判断する力を育成する授業を通して —

(2) 研究主題設定の理由

本主題でめざすことは, 現代社会の課題に対応した教材・実践を開発し, 社会に対する「認識」と「選択・判断する力」の両面をバランスよく育み, 社会を切りひらく子供を育てることである。子供たちがこれから生きていく社会は, より一層変化の激しいものであるだろう。少子高齢化・過疎化が進展し地域性が失われていくことが危惧される。また, 東日本大震災などを受けて防災・安全への対応が急務である。さらには, 科学技術が飛躍的に進展する流れの中で, 情報化への対応が必要となってくる。これらの課題を受け, 社会を見る際の視点や方法としての社会的事象の見方・考え方を働かせ, 深く社会的事象の意味や特色などを捉えられる子供を育てたい。そして, 社会的事象を捉えるだけに留まらず学んだことを活用し, 社会の在り方や課題, 今後の方向性などについて対話を通して多角的に考え, 選択・判断できる子供を育てたいと考え, 本主題を設定した。なお, ここで言う「選択・判断」は, 学習指導要領に示された「社会への関わり方を選択・判断する」ことであり, より広く「根拠をもって選んだり決めたりする」ことは「判断」と示す。

(3) 研究体制

附属学校部長 校長—教頭—主幹教諭

【各部研究部】
学習指導研究部
 学習環境研究部
 教育成果刊行部
 教育実習研究部
 生活指導研究部
 人権教育研究部

○**学習指導研究部**
 ・カリキュラム研究
 ・教育方法研究 (研究主題)
 ・教育方法研究 (授業研究)
 ・教育評価研究
 ・学習指導ホームページ研究
 ・教育情報研究

【各教科・領域部】
 社会

鳴門教育大学共同研究者

(4) 2年間の主な取組

平成29年度	4月	・アンケート等による子供の実態把握・分析 ・研究計画の立案
	5～7月	・大学機関と連携しての理論研究 ・第3,4学年における教材研究・単元開発 ・第5学年における教材研究
	10月	・第3,4学年における研究推進授業の実施 (講師：文部科学省初等中等教育局視学官 澤井 陽介 氏)
	11月～1月 2月	・研究授業の分析と修正案の作成 ・中間発表, 研究協議：理論, 実践についての考察, 次年度の取組について
平成30年度	5～9月	・第4,5学年における教材研究・単元開発
	10月	・第4,5学年における研究推進授業の実施 (講師：文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官 小倉 勝登 氏)
	11月～1月 2月	・研究授業の分析と修正案の作成 ・研究協議：理論, 実践についての考察, 研究のまとめについて

2 研究内容及び具体的な研究活動

(1) 研究内容

- ①現代社会の諸課題に対応した内容を扱う単元開発
ア, 第3学年における「市の様子の移り変わり」の単元開発及び実践(平成29年度実施)
イ, 第4学年における「自然災害から人々を守る活動」の単元開発及び実践
ウ, 第5学年における「情報を生かして発展する産業」の単元開発及び実践
- ②社会に対する認識の深まりと, 選択・判断する力の高まりをめざす場面設定と手立て
ア, 子供の「認識」と「判断」が相互に作用する授業場面の設定
イ, 授業場面における具体的手立て
- ③学びや変容を自覚できる自己評価と, 教師の見取りの方略
ア, 授業展開中における自他の考えの可視化
イ, 学習前後の考えの比較

(2) 具体的な研究活動

①現代社会の諸課題に対応した内容を扱う単元開発

本年度は, 学習指導要領において示された第4学年「自然災害から人々を守る活動」と, 第5学年「情報を生かして発展する産業」についての単元開発及び実践化に取り組んだ。(第3学年「市の様子の移り変わり」については, 平成29年度中間報告書に掲載している。)

ア, 第4学年における「県の自然災害」の単元開発及び実践

第4学年単元「自然災害から命や暮らしを守るために」

徳島県ではこれまでに起こった自然災害に対処してきたことや, これから起こりうる自然災害に備えて, 様々な取組を行っていることを理解することができるよう単元計画をした。単元の開発にあたり, 主に地震災害を取り上げ, 徳島県のとくしまゼロ作戦課, 県立防災センター, 地域の自主防災組織の会長からお話を聞かせていただいた。過去の災害については, 文献資料・統計資料を基に教材研究を行った。子供たちへは, 提示する資料を精選し, 友だちと対話的に学ぶ中で, 地域社会の一員として自分たちにできることは何かを考え, 自分たちの立場を踏まえて現実的な協力を選択・判断できるような場面を設定することとした。

イ, 第5学年における「情報を生かして発展する産業」の単元開発及び実践

第5学年単元「情報ー販売業では?ー」

コンビニエンスストア(以下, コンビニ)を主たる教材として, 「情報の種類」「情報活用の方法」を視点を単元設計を行った。単元開発に当たっては, コンビニLの本部担当者

き取りを行うとともに、書籍資料などを活用して教材研究を行った。特に、本部担当の方からは、「昔と今の情報活用の違い」や「情報を活用した最新技術」についても紹介していただき、教材研究が深まった。教材研究の成果を単元の構造図に整理した。情報の活用によって販売業が発展し、国民の消費生活が向上していることを捉えることができるように、単元を構想した。直接、社会への関わり方を選択・判断する単元ではないが、②のような判断場面を設定することで、今後の単元において選択・判断する際の土台となる力の育成をめざした。

②社会に対する認識の深まりと、選択・判断する力の高まりをめざす場面設定と手立て

ア、子供の「認識」と「判断」が相互に作用する授業場面の設定

徳島県の防災への取組の中心となっている「とくしまゼロ作戦課」の「死者ゼロ」をめざした取組は実現できるようになっているのかを一度立ち止まって考える場面として設定した。これまでに調べて学習してきたことを根拠にして、自助・共助・公助の取組から、現在の徳島県は地震に対してどれほど強くなったのか、これまでの学習を生かして考えた。自助が共助や公助につながるという「事象や人々の相互関係」に着目したり、昭和南海地震のときと比べるという「時期や時間の経過」に着目したりして認識を深めることにつながった。その浮き彫りになった課題を踏まえて「今の自分たちにできることは何か」を考える子供の発言を取り上げ、選択・判断する場面を設定した。選択・判断の場面は、友達と伝え合う中で、徳島県の地震災害への取組の課題ふまえ、自分にできることを伝え合う中で、更に深く認識することへとつながったと考える。

「情報を生かして発展する産業」の実践においては、「全自動のセルフレジ（以下、自動レジ）」が開発されている背景に焦点化して話し合う場面を、単元終盤に設定した。「多くの費用がかかるのに、なぜコンビニでは自動レジの開発を進めているのだろう」という問いを設定し、話し合いを進めた。話し合う中で子どもたちは、①速く正確に会計ができて便利である（消費者にとってのメリット）、②人手不足という現代社会の課題の解消につながる（販売者にとってのメリット）、③手間を省くことで人がやるべき仕事に集中できるという3つの点から理由を考えることができた。本時後半では③を受けて、「人がやるべき仕事とは何だと思うか」という判断を求める問いを投げかけることにより、販売者にとっての省力化であると同時に、消費者にとってもサービス向上につながるという、より深い認識を育むことができた。多角的（消費者・販売者）に背景を考え判断するという学習経験は、今後の単元において、社会への関わり方を選択・判断する際の土台となるのではないか。

イ、授業場面における具体的手立て

授業場面における具体的手立てとして、ここでは、「見方・考え方が働く資料提示」「焦点化する問いかけ」「社会の仕組みや関係が見える板書」の三つを示す。「自然災害から人々を守る活動」の実践において、現在の取組については実地調査・体験を取り入れた。過去の地震災害への対処については、徳島県の地震年表を作成するようにしたり、被害状況や被害を受けた方へのインタビューの回答の統計資料を用意し、そこから読み取ることができるようにしたりした。社会に見られる課題をふまえ、「今の自分にはできることは何か」と問いかけた。そうすることで、自分にできることは当然「自助」の取組ではあるが、その取組が、共助の取組や公助の取組につながることを深く認識することへとつながったと考える。また、板書には、子供たちの意見を災害が起きる前と起きた後、自助・共助・公助の観点で分類して書き分けた。そして、それぞれがつながっていることを確認できるように、子供の発言に合わせてそれぞれの相互関係を表すことができるよう矢印などで表した。

「情報を生かして発展する産業」の実践においては、書籍資料に示された関係図や、人手不足の様相が示されたグラフなど、「事象や人々の相互関係」「時期や時間の経過」に着目できる資料を用意した。また、先述のように授業の中盤で「(自動化が進む中で)人がやるべき仕事は何だと思うか」を問いかけた。この問いによって、情報を活用する人のあり方に目が向き、今後の販売業の発展の方向性を多角的に考え始める契機となった。さらには、子供たちが話し合った「自動レジの開発を進めている理由」について、消費者と販売者という立場に分けて板書するとともに、両者のメリットのつながりを矢印で表現した。

③学びや変容を自覚できる自己評価と、教師の見取りの方略

ア、授業展開中における自他の考えの可視化

「自然災害から人々を守る活動」の実践においては、死者ゼロに向けた取組が実現できるようになっているか、自分の考えをネームカードで示した。前時にまとめた取組の中からも、優先すべきことを選択できるようにした。「情報を生かして発展する産業」の実践においては、ワークシートに自他の考えを書く欄を設けて、自他の考えを比べながら話し合いが行えるようにした。話し合いでは「〇〇さんに似ていて」「□□さんに反対で」など、自他の考えを比較して発言する姿が見られた。

イ、学習前後の考えの比較

「自然災害から人々を守る活動」の実践においては、単元前に「大きな災害と聞いてどんなことを思い浮かべますか」と問い、単元の終末にその問いに対する回答を振り返った。子供たちは、単元を通して学んだことについて考え、自分たちの社会的な見方・考え方の成長を実感していた。「情報を生かして発展する産業」の実践では、見取り表を活用し、事前アンケートと事後アンケートの比較、本時前後の考えの比較などを通して、変容を分析することとした。また、子供たちの書いたものからだけではその真意が読み取れないことがあると考え、振り返り記述をもとに授業後に対話を行った。特に「自動レジの開発を進めている理由」を話し合った場面や、「これからのコンビニ（販売業）のあり方」についての記述については、抽出見を設定し分析を行った。

3 研究の成果と課題（○成果●課題）

- 学習指導要領に新たに示された「市の様子の移り変わり」「自然災害から人々を守る活動」「情報を生かして発展する産業」の教材研究の進め方を明らかにし、単元を展開する際に活用できる教材の資料化を行い、実践を行うことができた。特に「自然災害から人々を守る活動」においては、公助・共助・自助の関係性から社会に見られる課題の具体を見出す学習が展開できた。また、「情報を生かして発展する産業」においては、「発展」の内実を明らかにして、仕組みに深入りするのではなく背景を考える学習を展開できた。
- 単元の中に、社会に対する認識と判断が相互に作用する学習場面を設定し、その展開や手立て、評価の方向性等を事例的に明らかにできた。
- 単元の中において、考えの変容を見取って分析を行ったが、その変容が後の単元においても生かされるのか（選択・判断する力が高まっていると言えるのか）について、さらなる検証が必要である。
- 今回は、選択・判断につながる場面を中心に研究を進めた。今後、選択・判断する場面において、目的となる「問い」をしっかりともてるように、また、より現実的で社会科らしい対話ができるように支援を考えていきたい。

4 今後の取組

指定期間終了後は、今回の研究の成果と課題を地域に還元するとともに、さらなる研究開発に取り組みたい。今回実践した3つの単元のさらなる改善に取り組むと同時に、第6学年における単元や、第3学年～第5学年の他の単元においても実践化を試みる。そして、現代諸課題に向き合う単元を展開する中で、よりよい社会に参画する資質・能力の基盤として、社会に対する認識と選択・判断する力の両面をバランスよく育てていくための研究を深めていきたい。